

『暗夜行路』「第三」を読む

——あやうさを潜めた好転——

清 水 康 次

一 直子という存在

「第二」において、謙作は人々から離れ、孤立していく。圧倒的な大きさの外界に対して、彼は孤独に立ち向かうとしたが、そのために必要な〈心の張り〉を持続することはできなかった。「第三」において、謙作は、もう一度、現実的な人間関係の中に戻ってくる。直子との出会いがあり、人物たちとの関係の中で、謙作のあり方が問い直されていく。

「第三」の冒頭でまず描かれるのは、謙作の精神面での回復の兆しである。

謙作の大森の生活は予期に反し、全く失敗に終わった。彼は恐しく惨めな気持ちに絶えず追いつめられ、追いつめられ、そして安々とは息もつけない心の状態で来たが、不図した気まぐれで、一ヶ月程前から此京都へ来てみて、彼は初めて幾らか救はれた気持ちになった。

「大森の生活」の「失敗」について、放蕩に落ち込んでいったという行為の面ではなく、「惨めな気持ちに絶えず

追ひつめられ」たという心理の面が強調されている。「息もつけない」ほどに「惨めな気持」に追いつめられたという心の状態は、「第二」の第七章にも次のように描かれていた。

変な淋しさ、そして、暗い何か知れぬものが四方から被ひかぶさつて来る。そして今はそれを跳返すだけの力は、身中の何処にも潜んでゐなかつた。頭も胸も全て空虚だつた。さういふものは浸み込み放題だつた。彼は浪に捲き込まれた者が浪に身を任せ、その過ぎ去るのを待つやうな心持で、今は素直にされるままになつてゐた。それより仕方がないと考へた。

「惨めな気持」や「変な淋しさ」が外から入り込んでくる外物のように感じられ、それがどんどんふくれあがり、彼の心を占領し、彼を圧迫してくる。感情や気分が、心の中で増殖し、彼自身のものでありながら、制御できないものに膨張していくというあり方は、謙作の心のあり方として「第四」で振り返られることになるが、尾の道での心の状態から結局回復するがでなかつた謙作は、京都へ来て初めて息がつけるようになる。

古い土地、古い寺、古い美術、それらに接する事が、知らず彼を其時代まで連れて行つて呉れた。しかもそれらの刺激が今までのそれと全く異つてゐた。それが現在の彼には如何によかつたか。そして如何によき逃場であつたか。(中略)

彼は丁度快癒期にある病人のやうな淡い快さと、静けさと、そして謙遜な心持を味はひながら、寺々を見て廻つた。

「今までの」刺激は、謙作の心を駆り立て、昂ぶらせる方向に働いたが、「古い土地、古い寺、古い美術」は、反対に安らぎや静けさをもたらす。日本や中国の古典美術と京都の風景が謙作の心をいやし、落ち着かせ、満たしていく様子は何度も描かれていく。

如拙の瓢箪鮎魚図の前へ来て、それは日頃から親みを持つてゐたものだけに暫く見てゐる内にその絵の為に

段々彼の気持は落ちついて来た。絵から何か話しかけて来るやうな感じを受けた。

支那人の絵で南画風の松にも彼は感服した。気持が落ちつくに従つて絵との交渉が起つて来ると、呂紀の虎、それから矢張り支那人の描いた鷹と金鷄鳥の大きい双幅の花鳥図などに彼は甚く惹きつけられた。

吹き荒れていた「惨めな気持」や「変な淋しさ」は小康状態を得、東洋の古典美術が彼を落ち着かせていく。そして、東洋の古典美術との間に成り立つ対話や「交渉」が、やがて人との間にも成り立つようになってくる。この「快癒期」の中で、謙作は直子と出会う。「其日」、嵯峨野散策後の夕暮れ、鴨川の河原の家並みに、彼は「若い美しい女の人」を見つめる。「彼は其人に惹きつけられた。普段何気なく美しい人を見る時とは、もつと深い何かで惹きつけられ、彼の胸は波立つた」。そして、「全体これはどう云ふ気持なのか」と自問する。直子が謙作の心に残す余韻を描いた次の文章を見れば、それが右に引用したような、東洋の古典美術に接したときの印象と類似していることが明らかになる。

彼は自分の心が、常になく落ちつき、和らぎ、澄み渡り、そして幸福に浸つて居る事を感じた。そして今、込み合つた電車の中でも、自分の動作が知らずく落ちつき、何かしら気高くなつて居た事に心附いた。彼は嬉しかつた。其人を美しく思つたといふ事が、それで止まらず、自身の中に発展し、自身の心や動作に實際それ程作用したといふ事は、これは全くそれが通り一遍の気持でない証拠だと思はないでは居られなかつた。

直子は、謙作の心を落ち着かせ、やわらげる力を持った存在である。謙作は、しばらく、「彼に今、起つてゐる快い和らぎ、それから心の気高さ、それらに浸つてゐた」。そうして、次に、「此儘に此気持を葬る事は断じてしまふ」と決心する。直子への恋愛は、謙作の心が直子から強い力を受け取るという実感に始まつている。「第一」において、彼が愛子や登喜子に対して抱いたものは、「本統の愛情」や燃え上がる「熱情」そのものではなく、それらへの〈夢想〉であり、そのときの感情がいずれ「本統の愛情」に変わっていくことが希求されていた。直子に対

する恋愛は、少なくとも、現に自分の心が受けている刺激と「幸福感」に支えられている。そのことで「第三」の謙作は進むことができるのである。さらに、その感情においては、「第一」における女性への感情に内在していた（登喜子よりもお加代に対して明らかであった）性欲の要求が強調されていない。謙作は、直子への気持を「気高い騎士ドンキホーテの恋」に喩えているが、その始まりの時期において、直子は、向日的な力を与えてくれる存在として登場する。第三章において、友人の高井が直子を「鳥毛立屏風の美人」と評し、謙作がそれを「大変感じのいい評」と受け止めるところにも、直子の第一印象と東洋美術とのつながりが認められる。（注二）

しかし、第十二章において直子に再会したとき、謙作は直子を見て、幻滅する。

謙作は直子を再び見て、今まで頭で考へてゐた其人とは大分異ふ印象を受けた。それは何と云つたらいいか、兎に角彼は現在の自分に一番いい、現在の自分が一番要求してゐる、さういふ女として不知心（いっか）で彼女を築き上げてゐた。一言に云へば鳥毛立屏風の美人のやうに古雅な、そして優美な、それでなければ気持のいい喜劇に出て来る品のいい快活な娘、そんな風に彼は頭で作り上げてゐた。総ては彼が初めて彼女を見た、その一寸した印象が無限に都合よく誇張されて行つた傾きがある。

再会した謙作は、現実の直子と「頭で考へてゐた其人」との違いに驚く。最初の出会い以降、謙作は直子に会うことはなく、無自覚に、直子の像を、現実からは隔たった場所で、隔たった方向に増幅させていた。直子の像には、その意味においての〈夢想〉の要素があったといえる。それは、「第一」の〈夢想〉のように、無を有に転換してしまうほどのものではないとしても、そこには、ありのままの理解ではなく、自分をもっとも求めているものを与えてくれる存在としての理想化がある。（注三）そして、この頭の中の直子の像が崩れることで、謙作はようやく、現実の直子を直視していくことになる。

そのように、謙作の直子に対する理解は、現実から浮き上がっていたのであり、空回りしていた。「第三」では、

ひたすらに回復や上昇を求める「快癒期」の心のあり方が、さまざまの形で描かれていく。上昇的な流れは確かにありながら、心はさらに加速度的な上昇を夢想して、現実から遊離していきかねない。そして、謙作と直子との関係がなだらかに続いていくのではなく、第十二章において幻滅という大きな関門にぶつかると同時に、加速度的な上昇は常にあやうさを潜めて進行していくことになる。

二 心の上昇的な流れ

直子との出会いから結婚に至る過程において、謙作は多くの人々の助力と祝福を受けている。高井・山崎・石本・信行・S氏の好意と助力。また、お栄・咲子・妙子の手放しでの祝福。謙作はそれらを素直に受け入れ、謙作と周囲の人々との関係は好転していく。

「第一」では、謙作は多くの庇護を受けつつ、一方でそれに反発してもいた。(注三)前稿において述べたように、〈庇護者〉は、守ることに妨げることとの両面、功罪の両面を持っていた。竜岡や信行に庇護されている限り、謙作は衝突や破局を避けられるが、直に現実に向き合うことはできない。そして、すべての〈庇護者〉から遠ざかり、自分を見つめなおすのが「第二」の展開であった。「第三」において、謙作は再び人間関係の中に戻ってくるが、周囲との関係は変化していく。直子への求婚においては、信行やお栄にかわって、石本が重要な役割を果たすが、この石本に注目したい。

石本は「第一」の第三章に登場していた。彼は、常に謙作に対して好意的な「先輩」であり、このとき、信行に頼まれて謙作に縁談を勧める。彼らは、愛子との事での謙作の失意を気遣い、すこしでも早くそこから立ち直れるようにと思いやる。しかし、謙作は、好意には感謝するものの、結婚という自分の人生の重大事に介入されること

は受け入れられず、「不愛想に」石本の勧めを拒絶する。

今の謙作には昔ながらの石本の自分に対する老婆心が段々閉口になつて来た。同じ自分の事を心配して呉れるのでも兄の信行のはその呑気な性質の内に神経の行き渡つた所があるだけに彼にはそれ程気にならなかつたが、石本には絶えず何か教へようとする気が見えるので、好意は認めながら彼は時々腹を立てた。

信行の庇護には比較的従順な謙作が、石本の庇護に対しては反発する。それは、石本の教育的な態度が、庇護する者と庇護される者の間にある上下関係を謙作に意識させてしまうからである。庇護される者は、〈庇護者〉がよいと考える方向に導かれるが、そのとき、庇護される者の意志や主体性は無視される危険性があり、〈庇護者〉の考え方を押しつけられる可能性がある。「第一君のさう云ふ老婆心がうるさいんだよ」と謙作は言う。謙作は、彼のプライドにおいて、また、主体的であろうとする意志において、押しつけに過敏に反応し、警戒する。石本という人物は、信行と同様に功罪をあわせ持つ〈庇護者〉でありつつ、信行とは異なつて謙作に反発される〈庇護者〉の役割を与えられていたといえる。

しかし、「第三」の第五章において、謙作は、その石本に対して結婚の仲介を依頼する。

前に「君達にさういふ心配はして貰ひたくない」とか「さういふ老婆心が不愉快なのだ」とか云つた自分が一年経たぬ内に結局その事で世話にならねばならなくなつた事を彼は面白く感じた。(中略) 結局石本も信行のやうにさういふ事が謙作に意外に早く来、そしてそれが偶然にしろ、彼自身の手頼らねばならなくなつた事を心から喜ぶ事が知れてゐた。それ故、謙作には何の反抗心らしいものも起つては来なかつたばかりでなく、若し同じ事で石本でない人に手頼らねばならぬ場合を想像すると、それが偶然にしろ石本であつた事を彼は一層気持よく感じないではゐられなかつた。

以前には「世話」を拒絶した謙作が、今は自分から「世話」を依頼し、しかもそのことを「面白く」感じている。

このとき、謙作が石本に反発しないのは、結婚についての意志決定が既に自分の中で完了しているからである。かつて愛子との事の「傷手」に迷い、「少しも燃え立たない自分の心を悲し」み、「突き進」めなかつた謙作には、石本の好意は理解できても、その庇護を受け入れれば、それは自分を見失うことになりかねなかつた。しかし、直子との結婚を決意し、突き進むもうとしている今の謙作には、自分を見失うことはない。意志や主体性は既に謙作の中で確定しており、好意を好意として受け入れる態勢ができていたのである。その上で求める助力は、庇護ではなく、協力であるといえる。今、石本に協力を頼めることを、謙作は「気持よく」感じるが、その「気持よ」さの中には、石本に対する信頼や好意と同時に、謙作の自信を読み取ることができる。

明確で具体的な決意を持ったことで、周囲への警戒も、自身への疑いも軽減していく。謙作の意志や主体性が揺らがない限り、〈庇護者〉たちは〈協力者〉に変わり、謙作と周囲との関係は好転していく。

第五章で、石本との間に生じる「行違ひ」にも、謙作は「余り拘泥せず済ませ」ることができる。第九章では、石本との間に、次のような会話が交わされている。

「わざく／＼本統にありがたう」謙作はこれまで、こんなにはつきり石本に礼を云つた事などなかつたやうな気がした。然しそれが少しも変でなく口から出た。

「まあ、間違ないと見て、これから先の事はどうしよう。君一人では逆も駄目だらう？」

「うん」

「Sにやつて貰はないと困る事もあるが、大体、信行と相談して、此方で決めていいかい？」

「さうして呉れ給へ」

「決めたことはなるべく君の承認を受けるやうにはするが……」

「一々それをして貰はなくていいよ、大変だ。(以下略)」

石本への素直な感謝と信頼が描かれており、警戒心が消えている。そのような変化は、石本に対してだけではない。例えばS氏に対して、第十章に、次のような文章がある。

彼は色々S氏には世話になり、それをありがたく思つてゐながら、妙に機会がなく、これまで一度もS氏の家を訪ねなかつた。この事は気になつてゐた。気になりながら、矢張り彼は訪ねて行けなかつた。そして同様S氏の方からも一度も訪ねて来ない事が、時々彼を不安にさへした。(中略) 然し今、彼はかう云ふ拘泥した濁つた気分までも一掃されると、二重に晴々した気持になつて居た。

「第三」の前半部分、結婚までの展開において、多くの人々が謙作に好意を寄せ続け、謙作の意志を揺るがすような反对者や、再考を促すような批判者は現れない。反对者や批判者になると考えられる謙作の父は登場してこない。^(註四) 作者は、父の影を消し、代わりに妹の咲子と妙子を第十一章に登場させるが、この章は謙作兄弟姉妹の明るく、なごやかな空間を描いて、上昇の流れの頂点を形成している。謙作の父を登場させなかつたのは、作者の意図的な操作であると考えられる。しかし、作者は、一方で、上昇的な流れを疑わせるような小さなエピソードを配置している。

第六章において、お栄は、謙作の結婚を無条件に祝福するが、謙作は、お栄の中国行きに対して批判的である。

「あのね、……信さんはどう云つたか知りませんが、本統を云ふと、僕は余り賛成してないんです。不賛成がいへないから賛成したので、実はいや〜なんです」

これを聞くとお栄は一寸意外な顔をした。(中略)

「……兎に角、こんな事はもつとよく考へてから決める方がよかつたんです」

お栄は今更の反对に当惑して居た。

謙作の結婚に対しては登場しなかつた批判者が、お栄の中国行きに対しては登場する。ほかならぬ謙作自身が、

もし彼がお栄の立場であれば反発しているはずの批判者になっている。そして、彼は、自分の予想の正しさを信じ、お栄の選択に対する信頼や、意志に対する尊重を欠いている。謙作の周囲の〈庇護者〉が〈協力者〉に変化していくのに対して、謙作自身は、自分の考えを他人に押しつける〈庇護者〉に変貌していく。

謙作が周囲から受け取っているものと、周囲に与えているものとの間には相違があり、謙作と周囲との関係にはゆがみがある。そして、謙作はそのことを自覚しておらず、周囲との関係を十分認識できていない。だとすれば、彼の中で増大する周囲への信頼と自分への自信にも、空回りしている部分、勝手な思いあがりの部分があると考えられ、人間関係の好転には、不確かであやういものが潜んでいることになる。

三 解決する問題と残る問題

直子との結婚までの過程において、謙作は、いくつかの問題を解決し、また、いくつかの問題を解決せずに残していく。謙作に課せられた問題の動きを確認しておきたい。

第六章において、謙作は、自分の「幸福」と比べて、「丁度反対な世界が今、お栄に展らけつつあるのではないか」と考える。お才とともに中国へ渡るお栄の未来が、自分の未来と切り離されていき、自分が「幸福」に向かうのに対して、お栄は不幸に向かって行くと、謙作は感じる。「此儘にして居ていいのだらうか」と思いつつ、結局は、お栄との生活と訣別する形で、彼は直子との「新しい生活」を始めていくことになる。「新しい生活」を始めるために片づけなければならぬ問題の一つは、お栄との生活の問題である。

第七章、お栄との別離が決定的になった後に、謙作はお栄との距離を意識し始める。

謙作は近く別れねばならぬお栄と一緒にゐながら、今までにない一種の気づまりを感じた。かうしてゐる事

もさう長くないと思ふと、彼はなるべく外出もひかへるやうにしてゐるのだが、それが不思議に気づまりで、且つ退屈でかなはなかつた。第一、一緒にゐて、話の種が急になくなつたやうな気がした。

同居してゐてこそ、生活の具体的な細部について「話の種」があつた。例えば、「仔山羊」がどうか、家の作りがどうかかうように。別れるとなれば、二人の生き方の本来的な異質性が明らかになつてくる。お栄との別れにおいて、謙作は、「お栄がかういふ連中の一人になる事」が「堪らない」（第九章）と思うが、信行は、早くから「何といつてもお栄さんは矢張り水商売の人だね。幾らか昔の経験があるから考がどうしても自然そつちへ入つて行くらしい」（第四章）と判断している。お栄は、謙作にとって、「感情的に、一番近い人間」（第二）第五章）でありつつ、異質性を内に秘めた存在である。しかし、謙作は、そのような異質性について、つきつめて考えようとはしていない。

第九章では、いよいよ中国へ旅立っていくお栄を、謙作は京都に迎える。お栄と一つ部屋に枕を並べて、謙作はお栄を女性として意識し、寝苦しい夜をすごす。

前夜の彼の苦しみを知つてゐて云つてゐるとしても、お栄に対し、彼は殆ど恥かしいと云ふ氣は起こらなかつた。それは恥知らずの氣持ではなかつた。総てを赦してゐて呉れるだらうと云ふ寧ろ安心からであつた。若しそれがお栄に知られたとしても、その為め、お栄は怒りもせず、又自分を輕蔑もしないだらうと云ふ氣がはつきりしてゐたからであつた。

謙作は、このときのお栄の言葉を「どう解していいか分らず、お栄の氣持ちを理解できていない。それでいて、自分がお栄を意識したことが知られていても、お栄は「赦し」てくれるだらうと思う。二人の間に双方向の理解は成り立っていないにもかかわらず、謙作は、一方的に「赦し」や「安心」を確信している。そのような「赦し」や「安心」とは、親が子供に与える「赦し」であり、庇護する者が庇護される者に与える「安心」である。

謙作は、一方でお栄を母親のように親しい存在と感じ、他方で性的な欲求の対象として意識している。また、一方ではお栄に庇護されつつ、他方では、お栄に対して庇護者のようにふるまう。お栄に対して、謙作は自分の位置や姿勢を決めていないのであり、お栄の持つ二面性を都合良く利用している。彼は、矛盾した側面を癒着させていることに無自覚であり、関係を分化させ、明確化しようとはしていない。さらに、未分化な関係、未解決な関係そのものが、お栄なら許容してくれると甘えているのである。このような状態で、直子との新婚生活にお栄が同居すれば、「新しい生活」は危機に瀕することになる。「第三」では、お栄は直子にかかわることなく退場していき、この問題の解決は先のばしにされる。

*

*

*

第二章以降、「新しい生活」への期待が何度も描かれる。

かうして此事が順調に運び、うまく行けば、今までにない、本統の新しい生活が自分に始まるのだと思つた。実際今までは総てが暗闇に隠されてゐた。そのために、却つて恐ろしい黴菌が繁殖した。総ては明るみへ持ち出される。そして日光にさらされる。黴菌は絶やされる。そして、初めて、自分には、自分らしい本統の新しい生活が始まるのだ。

「本統の新しい生活」を始めるために片づけなければならない、より重要な問題は、謙作の出生の問題であり、そこから生まれる〈負の存在〉という意識の問題である。謙作は、出生の問題について、すべてを明るみへ持ち出し、「自分の出生を少しも隠す事なしに、話し、彼方むかうにその事から先づ解決して貰はねば」と考える。出生の問題を先方が乗り越えてくれなければ、直子との結婚には到達できない。先方が乗り越えてくれれば、結婚にも到達し、出生の問題も片づく。先方の答を待たなければならぬことで、彼は受身的な立場に置かれる。そのことで、不安

の気持ちも増幅される。

彼はこんな風にしてどん／＼事が進んで行き、又、或る所で不意にそれが破れたりするのではないかといふ不安を感じた。それが自分の運命だといふ気が近頃の彼には直ぐして来るのである。此反省は自身のいぢけた姿を突き付けられる点で二重に彼を暗い気持ちに誘つた。然し彼の他の心はそれを反撥し、殊更、自身をさういふ気持ちから超越ささうとした。

「快癒期」にある謙作は、自分が上昇的な流れにあることは自覚しながら、さらに上昇していきたいという期待と、どこかでたたきおとされて、元に戻ってしまうのではないかという不安を抱える。最悪の場合に受ける打撃を最小限にするために、今の期待も最小限にしておこうとする「いぢけた姿」も繰り返して描かれる。さらに、そういう自分を嫌悪する姿も繰り返される。

第七章、Sさんからの手紙が石本に届き、直子の側からの返答が伝えられる。

何よりも謙作を感動させたのは彼の不純な出生に就いて、Nといふあの老人が云つた言葉で、「……それは其人物の問題にて、却つてその為め奮発する底の人物なれば左様な事は少しも差支へなきものと信ずる由申され候」とかう書いてあつた事である。

謙作は、N老人（直子の伯父）の言葉に「興奮し」、「涙ぐみさうになる」。そして、「珍らしく彼は自信が持てた」。N老人の言葉は、謙作の拘泥していた出生の問題に、「少しも差支へなきもの」という治癒をもたらす。そして、直子との結婚の決定は、出生の問題が拘泥する必要のない問題であることに保証を与える。

出生の問題だけではなく、それを起点として生じる〈負の存在〉という意識も解消していく。「第二」において、出生の秘密を知った謙作は、自身を「罪の子」と見なし（第七章）、誰からも喜ばれないネガティブな存在であると考えていた。第十四章では、彼は、「総ての人が自分に悪意を持つてゐる」と感じ、「根こそぎ、現在の四圍から

脱け出る。これより道はない」と思う。そして、「全く別の世界、何処か大きな山の麓の百姓の仲間、何も知らない百姓、しかも自分がその仲間はずれなら一層いい。其処で或る平凡な醜い、そして忠実なあばたのある女を妻として暮らす」というようなネガティブな夢を思い描いていた。「第二」では、下降する心の流れの中で、彼はネガティブな夢を増幅させ、誇張された自画像を作っていた。「第三」では、「惨めな気持」や「変な淋しさ」がおさまり、〈負の存在〉という意識は薄らぐ。そして、結婚への過程において、石本やS氏をはじめ、多くの人々から繰り返し好意を寄せられたことで、彼は、自分がネガティブな存在ではないことを確認していく。第五章に、次の文章がある。

要するに自分は不幸な人間ではないと謙作は考へた。自分は全くの我儘者である。自分は自分の想ふ通りをしようとしてゐる。それを人は許して呉れる。自分は自分の境遇によつて傷つけられたかも知れない、然しそれは全部ではない、それ以上に自分は人々から愛されてゐたのだ。

心の上昇的な動きの中で、周囲への信頼と自分への自信が生まれ、謙作は、出生の問題からも〈負の存在〉という意識からも解放され、それらの問題は解決していく。

しかし、振り返って見れば、問題の解決は、「快癒期」の上昇的な流れや、好意的な相手に恵まれた幸運に支えられている。「第二」の下降的な流れが、ネガティブな夢を増幅させたとすれば、「第三」の上昇的な流れも、信頼や自信を過剰に膨張させているのではないか。どこまでが本当の回復であり、どこまでが確かな自信であるのかという疑問が残るのである。流れに乗つてもたらされる解決を彼は喜ばしく迎えるが、残されていく問題については自覚的ではない。例えば、次のような問題はどうかだろうか。

先に見た第七章におけるN老人の「却つてその為め奮発する底の人物なれば……少しも差支へなきもの」という言葉に謙作は感激するが、N老人の言葉と謙作の感激との間には微妙な齟齬が読み取れる。第五章にあるように、

謙作は「自分の事を彼方へ打明ける一つの方法」として「自伝的な小説」を書いてみるが、書き切れず、見せることもやめてしまう。石本は、「謙作がその事について尾の道から信行へ出した、最初の手紙」を先方に見せる。つまり、「第二」の第七章の手紙を見せたのである。それは、「それははね退けよう、起き上らうとする心の緊張は一層強く感じられた」（第十三章）時期の手紙であり、以後の謙作はその「心の緊張」を持ち続けることはできなかった。とすると、N老人が手紙に読み取った謙作と現在の謙作との間には相違があることになる。現在の謙作も「却つてその為め奮発する底の人物」であるのかどうか、彼は自分にそのことを問うていない。N老人の期待する謙作と、現実の自分とを見比べることなく、N老人の言葉から自信を得、信頼を得たと思いきなれば、そこには思いあがりや空回りが生まれてくるのではないか。上昇的な流れがもし下降的な流れに変われば、信頼や自信は再び失われてしまうのではないか。

謙作の回復や問題の解決は、あやうさを潜めたものであり、そのことを主人公が自覚させられるのが、第十八章・第十九章の「赤児の死」の事件である。その時、上昇的であつた流れは急変する。この事件によって、謙作はもう一度〈負の存在〉という意識につきおとされ、「暗い路」におしもどされる。

どうして総てがかう自分には白い歯を見せるのか、運命と云ふものが、自分に対し、さう云ふものだとならば、そのやうに自分も考へよう。（中略）自分は今までの暗い路をたどつて来た自分から、新しいもつと明か
るい生活に転生しようと願ひ、その曙光を見たと思つた出鼻に、初児の誕生と云ふ、喜びであるべき事を逆にとつて、又、自分を苦しめて来る、其所に彼は何か見えざる悪意を感じないでは居られなかつた。僻だ、さう
想ひ直して見ても、彼は尚そんな気持から脱けきれなかつた。

流れが変われば、消えたはずのコンプレックスも復活してしまう。ただし、〈負の存在〉の意識が復活するといつても、謙作と周囲との関係は修復されているのであり、「総ての人が自分に悪意を持つてゐる」といふような意

識は、もはや今の謙作には生まれてこない。そこで、「運命」の「見えざる悪意」が強調されてくることになる。つまり、確実に解決していく問題もあるのであり、突然の逆流によってすべてが元に戻ってしまうわけではない。

作者は、謙作の上昇的な流れを描きながら、そこに浮き足立った誇張や増幅があることを示し、あやうさが潜在していること、逆流の可能性があったことを描いていた。それが「赤兎の死」の事件につながっていく。「第一」において、例えば阪口について、激しい不快感が描かれると同時にその根柢の薄弱さが描かれていたことと同様の叙述の方法が、ここに見出される。ここでも、作者は、謙作の心の上昇的な流れを前面に押し出しているが、同時に、それがうわすべりや空回りかもしれないという疑いを示してもいるのである。作者と謙作の間には、従来考えられてきたよりもはるかに大きな距離がある。作者は、謙作に共感し、自己投入しているだけでなく、謙作のあり方を十分に批判的に捉えており、謙作の無自覚の部分の承知している。そして、作者は、上昇する力の作り出す展開が、謙作をどのような場所に連れ出していくかを細心の手つきで探り求めていく。

四 結婚によって生じる問題

第十二章において、結婚の日取りも決まり、謙作は直子と改めて「見合」をする。先に見たように、謙作は「今まで頭で考へてゐた其人」とは異なる印象を受け、頭の中の直子の像と現実の直子との違いに気づく。その幻滅の思いとともに、謙作の神経の疲れが描かれている。謙作の中に、「どうにも統御出来ない自身の惨めな気分」が動いていた。

彼は努めて何気なくしてゐた。然し段々に今は一秒でもいい、一秒でも早く此場を逃れ出たいと云ふ気分
被はれて来た。かう云ふ事は彼に珍らしい事ではなかつたが、場合が場合だけに彼は一層苦しい一人角力を取

つてゐた。お栄との結婚の予想が彼を一時的に放蕩者にしたやうに、此度も亦、多少病的にさうなつた事が、彼を疲らし、彼の神経を弱らし切つて居たのだ。

自由にならない「惨めな気分」の原因は、このときまで「多少病的に」放蕩に浸っていたことで、神経が擦り切れていたためだと、謙作は振り返る。「自制出来ない悪い習慣」を「慎まう」、「本統に慎み深い生活に入らなければ結局自分は自分の生涯をその為め破滅に導くやうな事を仕かねない」と、彼は反省する。出生の問題と（負の存在）という意識は解消していくとしても、性欲の問題が片づいたわけではない。また、「第三」の前半部分には、謙作が「統御出来ない自身の惨めな気分」に追いつめられる場面は描かれていなかったが、謙作の心の流動性がなくなつたわけではなく、統御できるようになつたわけでもないことを、この文章は明らかにしている。

このときの直子への幻滅と「惨めな気分」は、二三日後に直子と会つたとき、解消していく。直子はそのとき「見違へる程美しく、そして生々して見え」、謙作は「心の踊るのを覚え」る。彼自身も「至極気持が自由だつた」。次の有名な文章が続く。

彼は後から来る直子の、身体の割りにしまつた小さい足が、きちんとした真白な足袋で、褌をけりながら、すつくと賢こ気に踏み出されるのを眼に見るやうに感じ、それが如何にも美しく思はれた。さういふ人が——さういふ足が、すぐ背後うしろからついて来る事が、彼には何か不思議な幸福に感ぜられた。

印象的な描写が、謙作の得た「幸福」感にリアリティーを与え、展開に説得力を加えている。この「幸福」感は、謙作の傍にいる直子の存在から直に感じ取れるものであり、頭の中で作り上げていた「現在の自分が一番要求してゐる」像から得られるものとは違っている。謙作の受けた幻滅の打撃は、直子の存在感と、そのことが謙作に与える「幸福」感によって速やかに修復されていく。

「五日程して」、二人の結婚式が挙げられる。

此日も上出来にも彼は自由な気分である事が出来た。種々な事が、何となく愉快に眺められ、人々にもさういふ感じを与へ得る事を心で喜んでゐた。

舞子、芸子等の慣れた上手な着つけの中に直子の不慣な振袖姿が目立つた。その上高島田の少しも顔になづまぬ所なども、変に田舎染みた感じで、多少可哀想でもあつたが、現在心の楽しんでゐる謙作にはさういふ事まで一種ユーモラスな感じで悪くは思へなかつた。

そのとき、自由な気分でいられた謙作の目には、直子の「田舎染みた」姿も、「ユーモラスな感じで悪くは思へない」。しかし、「上出来にも」とか、「現在心の楽しんでゐる謙作には」という表現が、もしそうでなかつたならという想像を呼び起こさせる。謙作の心が流動するものである以上、「愉快に眺められ」、「心で喜んでゐた」という状態はいつ変化してしまうかわからない。もしかた謙作が「統御出来ない自身の惨めな気分」に追いつめられていけば、直子の姿は同じでも、謙作に与える印象は大きく変わってしまうだろう。

相手が信行や咲子・妙子のように離れて暮らしている相手であれば、謙作の心が流動するものであるとしても、気ままに会ったり会わなかつたりすることが可能である。お栄は、謙作の心の流動性を理解し、許容していた。しかし、直子は、慣れない謙作の気分の流動に一々対応していかなければならない。その上、謙作は「初めて会ふ人と長く一緒にゐると神経を疲らす方」（第十二章）である。他人との結婚生活は、謙作の心の揺れを大きくする。直子はそれに直面し、影響を受ける。そして、影響を受ける直子を見ている謙作は、自分の心を鏡に映して見ることになるのである、自身の心の揺れにのがれがたく直面していくことになる。とはいへ、実際にそのような悪循環が現れてくるのは「第四」においてである。「第四」の第八章に次のような文章がある。

彼は甚く弱々しい^いみじ^めな^な気持になるかと思ふと、発作的に疝癢を起こし、食卓の食器を洗ひざらひ庭の踏石に叩きつけたりした。或時は裁縫鉢で直子の着てゐる着物を襟から背中まで裁ちきつたりした事がある。こん

な場合、彼では其時ぎりの疝癢なのだが、直子は直ぐその源を自身の過失まで持つて行き、無言に凝つと、忍んでゐるのだ。そしてその気持が反射すると、謙作は一層苛立ち、それ以上の乱暴を働かずにはゐられなかつた。

「第三」においては、直子は、謙作の心の揺れを映す鏡ではなく、多かれ少なかれ、それを落ち着かせ、やわらげる力を持っている。「第三」では、まだ、「生活は至極なだらかに、そして平和に、楽しく過ぎ」（第十六章）ていく。

ただ、「平和」を破りかねない事件が一つ描かれている。第十四章において、花札での直子の行為を、謙作は「猾る」と思い、こたわる。

謙作は其盃だけが上の札で完全に隠されてある所から、これは直子がずるをしようとしたのだと思つた。

「ちよつとも気がつきませんでしたわ」直子も一寸いやな顔をして云つた。（中略）「猾い奴だな」と直ぐ一口に串戯じやうたんの云へなかつた処に何となく、それが実際直子の猾るだつたやうな気がした。勝負をしながら、彼は其事を考へた。彼は気を沈ませた。

しかし、このとき、謙作はそれを赦し、むしろ直子への愛情を深めていく。

「猾るは悪い」謙作は思つた。「悪い事は大概不快な感じで、これまで自分に来た。が、今、自分は毛程の不快も悪意も感じて居ない。これは不思議な事だ」と思つた。彼には堪らなく直子がいぢらしかつた。彼はその事があつて、反つて嘗つて感じなかつた程に深い愛情を直子に感じて居た。

謙作が、直子の手を自分の「内懐」に入れてやるといふ場面があり、謙作は、「何かしら甚く感傷的な気持になり、「痛切に今は直子が完全に自分の一部である事を感じた」。逆流の可能性を孕んだ小さな事件が、大きな上昇的な流れに呑み込まれて消えていくと説明できる。

この小さな疑いについて、疑いの真偽は見定められる方向には進まない。謙作は、直子と対話することを避けて、自分の心の中で問題を解決しようとし、解決できる心の状態にあることを確認する。この問題への対し方は、「第四」において、直子と要との性的な関係を知ったときの対し方と同じである。赦すか赦さないかは、相手との対話や争いにおいて答が出されるのではなく、もっぱら、赦せるか赦せないか、自身の心との対話や争いにおいて答が出される問題なのである。このときは、「毛程の不快も悪意も感じて居ない」心が赦すという答を出すのが、要との事では、謙作は直子を赦すことはできない。流動する謙作の心が、合理的な判断や相手との対話をかえりみることなく、答を出してしまう。そこに、「第四」における、「好悪が直様此方では善悪の判断になる」（第六章）という、彼の心のあり方の問題がある。

第十六章では、謙作はさらに幸運な発見に恵まれる。

或る時四人で其遊びをして居る時だった。偶然にも謙作は、それで直子を疑った、其同じ過ちを危く自身犯かさうとした。（中略）彼は此偶然を面白く思ひ、愉快にも感じた。直子のは矢張り見損ひだったのだ。同じ誤りを何か故意に自身にさせたかのやうにも思はれた。そして事実、その事で直子を少しも非難しては居なかつたにしろ、それが全く猾るでなかつたと思へる事は嬉しかつた。彼はその事を直子に云はうかと思ひ、矢張り云ひにくかつた。疑つた自身が恥ぢられたからである。

もし逆の偶然に出会っていたならば、疑いは確信に変わったかもしれない。謙作は、「此偶然」を「愉快」に感じるが、そのことは、「偶然」によって、どちらにでも傾きうるあやうさ、流動性を示してくる。「第二」での下降する流れの中で、ネガティブな夢想や意識が誇張されていたように、「第三」での上昇する流れの中では、信頼や自信が増幅されていく。小さな出来事が、その流れの中に置いて見られるとき、それは大きな意味を持ち始める。それにこだわり、それを意識することで、出来事の意味や謙作の気持ち、プラスにもマイナスにも膨張していく

のである。

*

*

*

「第三」の多くのエピソードが、「第二」とは異なる脈絡を作り上げつつ、「第四」の展開を準備する前奏となっている。

少し前、第十三章において、結婚の「祝物の返しの品」を買いに行った帰りに、謙作は、直子に「嫂のお政」の話をし、「決して心の楽しむ事のない絶望的な憂鬱」というような印象を受けたことを語る。さらに、「其春」書こうとして書けなかった栄花の話をした。

彼はそれよりも、現在、罪を犯しながら、その苛責の爲め、常に一種張りのある気持を続けてゐる栄花の方が、既に懺悔し、人からも赦されたつもりであつて、其実、心の少しも楽しむ事のないお政の張りのない気持よりは、心の状態として遥かにいいものだと思ふと云ふやうな事を云つた。

「第二」の第十一章・第十二章で描かれる、謙作の栄花への共感が直子に語られる。謙作は、出生の事実に向面し、自身を〈負の存在〉と位置づけ、同じやうな罪を背負うお政や栄花と自分とを比較していた。謙作の考えは、たとえ罪や悪や絶望があるうとも、息苦しいほどに緊張し、張りのある心を持つてゐることの方が、救いや善を手にしていても、緊張した心を失つてしまふよりは「遥かにいい」というものであつた。

これに対して、直子は、「悪い事をして、云はない間は、それは苦しい」が、「それを云つて了ふと本統にせい／＼」すると反論する。謙作は、「あなたの悪い事と、お政や栄花の悪い事とは一緒にならないよ」と言うが、謙作と直子の間でくいちがっているのは、「悪い事」の内容ではない。直子は、自分がお政や栄花の立場になつた場合、〈負の存在〉というやうな意識を背負うことは嫌であり、〈心の張り〉とか「悔悟の気持」とかを持ち続けるこ

とよりも、早く赦されて平和で穏やかな生活に帰りたいと思っている。二人の考え方、価値観が異なるのである。謙作から見れば、「懺悔」によって、平和で穏やかなもとの生活に戻ったと思っても、それはうわべだけの贗物で、心からの楽しみは決して帰ってこないという考えがある。二人の価値観は異なるが、このときは、直子がお政や栄花のような罪を犯しているわけではなく、考えの違いを明らかにせずには衝突を回避することはできる。しかし、後の「第四」の第十章では、もはや衝突を回避することはできず、直子は、「貴方はお考へでは大変寛大なんですけど、本統はさうではないんですもの。あの時にも何だか貴方があんまり執拗しごこいやうな気がして恐しくなりましたわ」と言うことになる。

ここで注目しておきたいのは、謙作の立場が、会話の展開の中で、罪を犯した者の側から、それを赦す側に転移してしまうことである。

「……悪い事によつては懺悔したら其儘その気持を持ち続けてゐて呉れなければ困るといふやうなのがあるだらう。直ぐせい／＼されたらいい気がしないよ」

「誰がいい気がしないの？」

「誰れがつて……悪い事をされた人が……」

「執念深いのね」

「懺悔もいつそ懺悔しなければ悔悟の気持も続くかも知れないが、仕てしまつたら却つて駄目だね」

「そんなら、どうすればいいの」

「……」謙作は不意に云ひ詰まつた。彼には不図亡き母の事が想ひ浮んだ。彼は陥穴おとしあなに落ちたやうな気がした。

謙作は、もともと彼がお政や栄花であつたならばと考へていたのであり、そういう話をしてきた。しかし、直子は、自分がお政や栄花であつたならばという立場でこの話を聞き、謙作をお政や栄花に対立する立場、彼女たちを

赦す側の立場に置いて考える。この直子の理解に引きずられて、「誰れがつて……悪い事をされた人が……」と答えていくうちに、謙作は、「悪い事をされた人」の立場、彼女たちを赦すあるいは赦さない、いわば裁く者の立場に置き直されてしまう。この立場の置き換えが、先の花札事件とかわりながら、「第四」の赦す・赦さないという問題につながっていく。

右の文章において、謙作は、裁く者の立場に立たされ、「亡き母」をお政や栄花の立場に置いて考える。そのとき、「直ぐせい／＼されたらいい気がしない」というような言葉が、母に向かう言葉でもあることを初めて自覚するのである。彼の考えが一人歩きを始めれば、それは、母に対して苛酷な考えとなることに、彼は気づく。自分にとっては、〈心の張り〉を持ちつづけたいという考えが、相手にとっては、一旦罪を犯した者は「悔悟」することも認められず、赦されることもないという、苛酷な考え方に変わってしまう。直子との対話によって、自己鞭撻の理想主義は不寛容な厳格主義に姿を変える。直子との関係において、謙作の個人的な考えは明るみに出されて、別の方向からの光を当てられる。そのようにして姿を変えた自分の考えに、謙作は驚きつつ直面することになる。

「第二」において、孤独の中で自分を見つめて形作った謙作の考えが、「第三」では、他人との関係の中で疑われ、問い直されてくる。〈負の存在〉という意識は、彼に好意を示す多くの人々に出会ったことで解消していく。一方、〈心の張り〉という理想については、他人と共有できるものではないことが明らかになる。彼は今、「人と人と人との関係」(「第四」第十四章)の中にいるのであり、孤立した一個の点として、世界に立ち向かっているわけではない。孤独の中で形作った考えは、現実的な人間関係の中で姿を変えていく。^(注五)

どのような考えにもそれを受け止める相手があり、どのような問題も自分の中だけで片づくものではないということに謙作が自覚し、そのことを受け入れられるようになるのは、まだ先のことであろう。その前に、まず、謙作は、流動する心のあやうさに対処しなければならない。

謙作の心は、上昇する流れの中では加速度的に上昇を拡大し、下降する流れの中では加速度的に落ち込んでいく。浮き足立ち、うわすべりした自信も、誇張されたネガティブな夢想も、同じように本当の彼自身を追い越して、歪曲された自画像を作っていく。「惨めな気持」や「変な淋しさ」が小康を得たとしても、他人からの好意や信頼が確信できたとしても、彼は、まだ現実の根を下ろしているとはいえない。そのような彼自身の心の持つあやうさを問うことが彼の課題であり、「第四」はその問いを担うことになる。

注

(一) 小森陽一氏は、「いまだ終らぬ行路」(『解釈と鑑賞』第五十二巻一号、一九八七年一月)において、「謙作のこのときの「眼」は、本当の意味で直子という人格を見ていたことにはならない。ただ「古い土地、古い寺、古い美術」を見ていた「眼」に、直子が特別美しく見えただけである」と指摘し、そこに「頭だけが大きい」時任謙作の、〈他者〉と関わる典型的な姿勢^{スタイル}を見出している。

(二) 宮越勉氏は、「時任謙作の人間像をめぐる考察——『暗夜行路』の展開に即して——」(明治大学文学部紀要『文芸研究』第八十六号、二〇〇一年八月)において、「謙作は直子を自分の求める理想の女性として「頭で作り上げてゐた」。これはまさしく夢想家の恋であったのだ」と指摘している。

(三) 清水康次『『暗夜行路』「第二」を読む——直面の時・発見の時——』(『京都光華女子大学研究紀要』第三十九号、二〇〇一年十二月)

(四) 「第一」に描かれる愛子への求婚において、謙作の父は、「お前も今は分家して、戸主になつて居るのだから、さう云ふ事も余り此方に頼らずに、なるべく、自身でやつて見たらいいだらう」(第五章)と言っている。謙作の直子との結婚の進め方がまったく不自然だというわけではない。

(五) 清水孝純氏は、「反覆の詩学としての『暗夜行路』——ドストエフスキーを視座として」(平川祐弘・鶴田欣也編『暗夜行路』を読む 世界文学としての志賀直哉 新曜社、一九九六年八月)において、この作品には、さまざまの主題が「反覆されて登場」し、「反覆される毎に謙作に以前の認識の訂正、深化を要求するという形で、彼自身それまで知らなかった自己を謙作に開示してゆく」という構造があると論じている。意味深い論であると思う。私も、「『暗夜行路』「第二」を読む——「結論」への疑い・「答へる事」の限界——」(『光華女子大学研究紀要』第三十八号、二〇〇〇年十二月)において、「第二」について、そのような構造を私なりに分析した。